
僕らの思い

奏

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの思い

【Nコード】

N4780R

【作者名】

奏

【あらすじ】

7歳のときに、死んでしまった少女――凜が天国にある未成年で死んだ者が入学する「ヘブンス学園」で、カナタ・アオイ・チサトと協力しながらポイントを集める。これが300ポイント貯まると、最後の試練に臨むことができ、最後の試練に見事合格すると転生するチャンスが与えられる。

ゼロ（前書き）

初投稿です。

ゼロ

「ママが泣いてる・・・パパも・・・凜はここだよ！！泣かないで！！」

私はパパとママの隣にいるのに、気づいてくれない。

パパとママは、ベッドに横たわる傷だらけの私を見て、泣いていた。

「凜・・・凜！！！！」

ママは何度も何度も、私の名前を呼んだ。

「ママ！私はここにいますよ。」

抱きついた腕が、簡単にママの体をすり抜ける。涙で目の前が揺らぐ。

本当は、もう分かってた。パパとママが気づいてくれない理由。だけれど、認めたくなかった。

交通事故で私が死んだなんて・・・。

早歩きで校舎の廊下を進む1人の少女。その顔は怒りに満ち溢れていた。右手に握られている1枚の紙は原型を留めていないぐらいグシャグシャに握りつぶされ、解読ができるかさえも危うい・・・。だが、そんなことにはまったく気づいていない少女は、3階から4階へと通じる階段を駆け上がり、重そうな鉄の扉の前に立ち、勢いよく扉を開けた。

バターン！！！！という大きな音とともに、心地よい風が少女の長い髪を揺らす。

今日は、晴天だ。しかしそんなことに構っていられない少女は、屋上の一番奥のフェンスにもたれ掛かるようにして、扉が開く音も聞こえないほど熟睡している少年の元に早歩きで駆け寄ると、

「カナタ起きろ！！！！！！！！」

と、耳元で叫んだ。

「うつわわ!!!」

そんな、不幸な少年は少女の声で、情けない声と共に跳ね起き、周りを見渡した。

どうやら、状況がまだ掴めていないらしい。

しかし、少女はそんな少年――カナタの目の前に、先ほどから握っていた・・・握りつぶしていた紙をちらつかせた。

「ねえ。カナタどういうこと!!!?」

「・・・・・・なにが・・・・?」

カナタは紙から目をそらし、頭をかいた。

「とばけないで!!!!この間のテストの結果!!!!何?この点数!!!?」

少女は、出来の悪い子供を持つ親、あるいは教育熱心な親が定期的に言うであろう台詞を早口でまくしたてた。

「ああ・・・・。だって全教科白紙で提出したしな。」

少女が持っている紙に書かれている内容はこうだ。

ヘブンス学園 中部部 第1学期 期末テスト (27班)

アンザイ	リン	9教科合計	780点
シラサカ	アオイ	9教科合計	712点
ユウキ	チサト	9教科合計	663点
アンドウ	カナタ	9教科合計	0点

4人合計 2155点

100班中 50位 保有ポイント0点

と書かれていた。ところどころ切れていたり、何をどうしたらそんなにグシャグシャになるのか。というほどグシャグシャなので相当

がんばらないと解読は不可能だが・・・。

「全教科白紙ってありえない！！！！カナタのせいで100班中50位だよ！？」

「いいじゃん。キリがいい数字で。それに俺が真面目にやってたって10位以内に入るのは無理だったって。」

「そんなの、分かんないじゃん！！！！みんな一生懸命やってるのに！！！！」

何でか知らないけど、涙目になる。それをカナタには見せたくなくて思わずうつむいた。 「まあ。過ぎたことはしょうがないでしょ。次がんばればいいじゃん？」

カナタはそう言うのと立ち上がり、うつむいている少女の脇を通って扉の奥に消えていった。

初めは怒っていたはずなのに、今はすごく悲しい。

カナタが分かってくれないからじゃない。ただ、カナタにうまく言い返せなかった自分が悔しい。 保有ポイント0がそれをさらに大きくする。

「・・・・・・こんなんで生き返られるのかな・・・・??？」

少女の心からの言葉は、真上に広がる青く澄んだ空が静かに吸い込んでいった。

ゼロ（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

まだまだ分からないことだらけなので、指摘していただけるとありがたいです。

オンナノコ

カナタに最もな事を言われ凹んだ数分後、少女は自分のクラスの後ろの引き戸を開け中に入った。

ふと教室に掛けてある時計を見ると時計の針は、午前9時をさしていた。後10分でHRが始まる。

そんな時だった。1人の女の子が前からすごい勢いで抱きついてきた！！

「うわー！！」

少女は、思わず数分前どこかで聞いたマヌケな叫び声をあげ、女の子に押されるような感じで、先ほど閉めた引き戸に、腰を思いっきり強打……。

「つつ……」

声にならない声を発し、そのまま床に座り込んだ。強く抱きつかれているので、痛い箇所にも届かない……。本当は撫でて少しでも痛みを和らげたいのに……。

少女は、ため息をつくと女の子の名前を呼んだ。

「チサト……」

「リンちゃん！！」

女の子――チサトは少女――リンの胸のなかで泣きじゃくり始めた。次第に、2人の周りにクラスメイト達が集まり始めた。

みんな、何があつたのか知りたいようでソワソワしているが誰1人として理由を尋ねる者はいなかった。

「チサトどうしたの？」

リンが優しく問いかける。

「だ……だつてテスト……ト……」

チサトは嗚咽まじりにそう言うと、リンの体を思いっきりしめていた腕を離し、ずっと手に持っていたであろうクシャクシャ（リンほどではないが。）の紙を突き出した。

リンは先ほど強打した腰を左手で摩りながら、右手でチサトが突き出した紙を受け取り目をおとした。

それは、やはり今回の期末テストの結果。

その紙を見たとき、チサトが泣いている理由が分かったような気がした。

思わず、保有ポイントの欄を確認するが、ポイントはやはり0。

定期テストでは、順位ごとにもらえるポイント数が異なり、1位は10 2位は9 3位は8 4位は7 5位は6 6位は5 7位は4 8位は3 9位は2 10位は1ポイントが加算される。

このしくみは、ヘブンス学園の小等部のときから決まっていたので、1位をキープしている班は一体何ポイント貯まっているのか……。そんなことを考えると、涙が出そうになるほど落ち込むので、あえて計算はしないとリンは心に誓っている。

「ご……ごめんね……。チサトがもつと点数取ってれば……」

チサトは泣きながらまたリンに抱きつく。

肩を震わせながら泣く、同じ年齢でリンよりひとまわり小さな女の子。

自分のせいで、迷惑をかけていると思っている、優しくて内気な女の子の頭を撫でてあげることしか、このときのリンには出来なかった。

そのとき、HRの始まりを知らせるチャイムが、学校中に響きわたった。

オンナノコ（後書き）

読んでくださって、本当にありがとうございました。
次話もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4780r/>

僕らの思い

2011年10月8日18時47分発行